九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州帝国大学新聞

https://hdl.handle.net/2324/1520434

出版情報：九州大学新聞. 242, 1941-10-25. 九州帝国大学法文会新聞部
バージョン：
権利関係：

現段階に於ける貿易政策

―資産凍結と新貿易體制―

野崎龍七

國防國家の貿易政策が如何にあるべきかの問題は暫らく措くとして國際情勢が緊迫し、米國が資産凍結令の對日適用をして以來、わが國の第三國貿易が顯著に

米國商務省は、昨一九四〇年度の對日輸出入狀況について、次ぎの如く報告してゐる。

一九三七年以來、米國の對日輸出品は意外のほか、大部分、日本の重工業に必要な物資、特に石油、屑鐵、銅材、銅および機械工具類であつたが、根花について、引續き一九四〇年上半期貿易中、重要な位置を占めたけれども、下半期に至つて急激に減少した結果、一年を通じて不利な貿易となるとは對日輸出額の極めて小部分を占めた事に過ぎない。過去數年間のそれに比べて遜かに少かつた。しかして一九四〇年の對日輸出額は二億二千七百萬弗であつて、一九三八年に比べて一千三百萬弗、一九三九年に比べて四百萬弗の減少である。右は、一部分、米國自體の國防計畫のため及び輸出許可制度の結果に基くものであつて、屑鐵、銅材料、機械類の輸出は下半期に至つて減退し、屑鐵の輸出は十月及び十二月には輸出許可を受けるものとなつた。

日本からの輸入は一億五千八百萬弗で、前年に較べ極めて小數の減少である。生糸の買付は數量において減少したが、價格の騰貴と為替の金額において一九四〇年においても對日輸入總額の約三分の二を占めてゐる。

支那事變に關して不當な國際輿論を理由として、米國が對日經濟政策を講じたのは十三年六月であるが、當時は輸出業者に對するモーラル・エンバーゴーの勧誘であつた。それが昭和十五年七月以來輸出許可制の實施となり、對日政策は社會に性格的基礎を與へられ、十六月、屑鐵全部の輸出禁止と銅、諸武器の輸出許可を要する旨の對日輸出禁止を宣言するに至つた。

この間、對日輸出品の種類は、十三年に比較して九百萬弗（三分八厘）、十五年は十四年に比較して四百萬弗（一分七厘）の、それぞれ減少であつた。

四百萬弗（一分七厘）の、それぞれ減少であつた。

四百萬弗（一分七厘）の、それぞれ減少であつた。

十二月に卒業

科學

天然絹糸の行衛

多くは農業的或は生物的研究であり、工業的研究も多くは手工業的であり、多量生産的近代工業化に對する研究が不足してゐる……養蠶、製糸の改良進歩の如きは微々たるもので、硝化法人絹が他の優良なる人絹に壓倒された如き激烈な優勝劣敗の跡なく、從つて新研究に對する熱意をかき、積極的の研究を企てず惰眠をむさぼつてゐた

祖父江寛

我國生糸の大半は生糸のまゝ海外に輸出されて了ふ生産費、輸出費、更に二重の絹織物輸入費は安織物として輸出されて結局九〇%が海外市場に依存してゐたのであるから時勢の變遷以後多大の為替方面の消費費の合が増加したとは云へ、輸出大戦と米國の貿金禁絶による生糸の輸出不能は我天然絹糸に對し大きな衝撃を與へんとした。

幸ひ政府の對策宜しきを得て一時の人絹作用の衝撃は防ぎ得たとは云へど輸出に對する充分なる製策の考究は殆ど無余なる大問題であらう。

一方我國は絹糸の輸入比率によつて絹織物の不足に苦しみつゝあるを以てこの研究に此餘剰生糸を用ひ得れば最も妥都合なる事は何人も考へ及ぶであらう。しかし乍ら生糸は繭であつて繰糸業であつて繊維工業的な用途に用ふべくもない。天然絹糸の更生としては其の繊維工業的研究をなし、硝化法人絹より絹糸法人絹へ更にザイコース法人絹、醋酸人絹と後進したのに對し、繰糸、製糸の改良進歩の知識は僅かなるものであり、多數生産的近代工業化に對する研究が不足して居る樣に思はれる。又新方法の發明並にこれが工業化に對する努力が足りない。人絹製者が多數の研究費を用ひて各方面に對する

十二月に卒業 在學卒業年限短縮

國防教育に新紀元

國際情勢の緊迫に伴ひ、國内各般の事項に亘り臨戦態勢の整備強化は焦眉の急であり、時局の要請は學園をして直接國防への要員充足並びに勞務動員の完遂の必要に即應せしめることになり、大學及び專門學校生徒の在學年限、又は修業年限を臨時措置としてそれ〳〵六ケ月以内短縮し得る教育に關する重要案件が本極りとなり十五日政府から發表された

國家總動員の要請に應づき學生生徒の勤勞戦闘隊編成に關する勅令、兵役に關する勅令が發布され、明春三月卒業豫定のものは本年十二月に卒業し、徴兵檢査は十二月に受ることになつた

在學戦闘隊編成に關する先例としては大正九年に於ける大學及び高等學校の學徒の軍事教育に伴ふ戦闘隊編成と昭和十三、四の戦時度に實施をみた實業學校關係諸學校の卒業繰上げとの二つがあるが今回の措置は「國家總動員法」に關するだけの萬やむを得ざるに出づる措置として我國の學徒に技本的改革を加へるものではないとされてゐるが我國學徒に投じたるその一石は、先に總成された學校報國團の使命と共に國防教育に一紀元を劃するものと見るべきである

本學に於いてはこれに對應して文部省から傳達された趣旨に從ひ十二月卒業に對し數次に亘る改授會を開き萬全の對策を講じてゐる

鍋島川總長は先日總成された帝大總長會議より歸學、學課改革に對して懇談會を開き、帝大關係をとげてゐる

學生稻刈奉仕

福岡縣では今秋における學徒勤勞奉仕について二十一日福岡、久留米、直方、行橋の四ケ所で縣當局、方の學校、國民職業指導所、農會との連絡懇談會をひらき具體計畫を決定した

それによると中等學校以上大學まで約三四十校の男女學生々徒實人員十二萬八千人、隊員五十萬人を動員、郡農會の計畫にもとゞき、この廿五日ごろから十一月中旬までに學校を中心とする部落農村に繰出し稻刈や脱穀作業に從事することに決定、本學は稻屋縣で行ふことになつてゐる

いざ來れ敵機 學園に鐵壁の守あり

—綜合防空訓練—

昨夕十八・十九の兩日に亘つて行はれた綜合防空訓練の第一日目は十八日午後三時の空襲警報の發令を以て開始され、十九日は午前九時早朝の空襲警報をきつかけとして本學上空に現はれ急襲に次ぐ急襲をくり返し、動學部は火災を起し、十九日は午後一時となつての敵機來襲にも綜合訓練が行はれた

先に結成された本學報國隊は空襲に際し防護團に編成され、各部の使命以下、各班の活躍目覚しく、銃後學生の意氣天をつくの概があつた

十九日に行はれた綜合訓練は前日來の雪もかなりと喚れて訓練は早くも午前九時早朝の空襲をきつかけとして本學上空に現はれ急襲に次ぐ急襲をくり返し、動學部は火災を起し、法文學部にも又爆撃が敢行されたが、敵機は直に現場に急行、各部に消火に鎮火をあげて引き上げれば、救護隊また見事な活躍ぶりを示し一糸乱れぬ連絡を示した

彼等の學徒は彼等の手でと、死守防禦の覚悟を秘めて本學防空訓練

更に午後に入れば工學部應用化學教室にガス彈が投下され、防衛救護隊は時を移さず負傷者の救護

本學報國隊は先頃結成、戦時下の學徒として常にその特技の發揮に備へ、朝有事に備へ、警備の結成、の結成、効か、

閑院宮春仁王殿下 本學に御成り

工農兩學部を御見學

大觀の雲霞晴れ渡る秋の朗晴、紅葉の錦心に御歩を運ぶ一行の御顔色春仁王殿下には十六日午…成り…

特技隊と特別警備隊 結成

今秋を飾る 三つの記念祝典

時局は益々緊迫し國内は一致結束して國難難關の難關に邁進しつゝあるとき、大學の使命は一段と重大さを加へつゝある

内外の研究や思想を研磨し、選取し、以つて我が國の國家なる文化を維持し發展せしむることは我々の義務でなければならぬ

かうした重大な責務を負つて日々邁進しつゝある我が九州帝國大學において来る五月十一日開學三十周年の祝典を迎へたが、今秋は重ねて三つの記念すべき祝典を迎へることとなつた

農學部創立廿周年 記念事業の企

大正十年四月、農學部長、農學部長、本田幸介博士の下に創立された農學部は去る昭和十一年に、九州帝國大学に移管され、爾来十五年間を行つたが、今年で廿周年を迎へるのを記念して十一月九日の日曜から翌日、學生生徒を招ぶ、これを記念して十一月九日の日から三日間にわたり總長以下職員者の列の下に盛大な記念祝典を挙行する事になつた

附屬温泉治療學研究所 創立十周年を迎へて 記念祝典催さる

温泉治療學の學理と實用に關する綜合的研究機關として我國斯學の最高をゆく本學附屬温泉治療學研究所が別府市に設立されてより今年で創立十周年を迎へたので来る廿一日から三日間にわたり總長以下職員者の列の下に盛大な記念祝典を挙行する事になつた

理學士の門出を祝ふ 開學記念式

理學部が開學してから今年は第十三回、十二月には第一回の理學士を社會に送り出すが、之を記念すべく、當局者から福岡市民に理學部では、盛でより祭を繰つてゐるが、愈々十一月八日午前十一時から、場で時局柄簡素な開學記念式を挙行、終つて招待者に學内解放をなし、聞いて二時から福岡市記念講演に於いて、一般市民に…普及をも兼ねる…

農會の新人 エジソン

EDISON THE MAN

せら躍胸とルリスすや冷を肝
を姿の日

三大作封切
雨の西班牙
旅路の果て
順次近日封切

報 叢 那 支
原本復刻 印 20 卷
邦文解説 20 卷
全 40 卷
◇監修◇慧
岩井大華◇
◇解説執筆◇弘
百瀬雄彦
沼田鞆雄郎
矢澤利太
前田勝雄
榎一
申込 10月31日限
四期分拂 ¥370.00
福岡市上西町
丸善株式會社
東京・大阪・神戸・名古屋・京都その他各地支店出張所

MARUZEN
近世機械學 全巻
工學博士 宮城音五郎 著
工學博士 厚木勝世 著 新刊
化學工業通論
工學博士 平岩廉邦・福田政次郎・井上齡造 共著
しろねずみ
新刊 —飼育・殺生・解剖—
丸善株式會社
東京・大阪・福岡・名古屋・札幌・その他

文藝

文學精神の危機

―得能五郎の生活と意見について―

赤木俊

伊藤整の『得能五郎の生活と意見』は、今日の文學の動きを意識するうへに、ある手掛りをあたへてくれる。それは、自然主義の脈内から生れ、明治、大正、昭和にかけて、綿々とつづき、あらゆる種の文學方法にいつのまにか感染してしまふ、なにか潜在的に根強い私小說的觀念から、獨自な方法で脱け出さんとしてゐるものであるからだ。獨自な方法とはなんであるか。それは私小說的雰圍を利用しながら、其處に留らず、もつとひろい世界に出て行かうといふ意圖のもとに生れた方法である。私をとりまく他の客觀化を通してゐるのだ。私自身の客觀化を通してゐるのだ。作者は說明してゐる。「……『私』なるものが客觀化され、どういふ社會のどういふ時代に屬するどういふ性格であるか、といふ點出において書かねばならない。またその『私』の告白のやうなものも、讀者の『心境』になる事實や感に依據せず、客觀化されて、ある時代ある性格のある行爲なり心理なりの一部として『描かれたもの』としてあるべきであつた。得能が突然に自覺するとき伊藤整のほんたうの顯が得能といふ個人の顯觀に於て、換言すれば、一歩私の外に出ればたちまち通俗小說と何人文學精神のなかに於て、作者自身たる私の客觀化を通りぬけて、しんの客觀小說が開花するだらうといふ見通しはきはめて安易なものであらう。いはば層實なる辺境としての伊藤整の方法はたかく評價されねばならない。

しかしこの正しい方法かたんなる觀念の表現に留るか、作品のなかに實現されるかは、きり離して考へる必要があらう。ところでこの作品のねらひが、觀念の客觀化にあるのではなく、觀念の客觀化されてゐるといふことは注意されねばならない。殊に觀念が物語になつてくる。作中人物と作者はたがひに動いてゐるのである。二人が離れたがら等距離で動くとすれば、そしてそれが客觀化されてゐるとすれば、それはそれで成功である。

× ×

けれどもこの作品における二人の觀念は必ずしも密着してゐない。伊藤整はときどき見を切らす。『とにかく、横から覗はこの家の前の空間に野菜や薬をつくつて、食物を豊保する。長代だけなら何と かして暮らしやゆけるだらう。』（『學生時代』）などと、得能が突然に自覺するとき伊藤整のほんたうの顯が得能といふ個人の顯觀に於てつた表現をしてゐるのを無視すると。得能は時期に過ぎだられて、無かるく断ぜだしてゐるが、伊藤整はやのうしろでとまどひしてゐる。主人公と作者の事實には かならない。作者の私はけつして客觀化されてゐない。

そのやうな得能のあとを追はねばならぬ讀者は、たとへば得能が農作物への素朴な感覺から發して過去十何年になる作家生活を顧みるやうな言動に出逢つたとき、伊藤整の意を想ひつつ作品に不信の念を抱くのである。そして、『自分を客觀者であり得ると思つてゐる他の文學者としての氣分は一度崩してしまつて、生活者としての他の生き方と調ぜさせなければならない……』（『トロイカ』）と言はれたとき、文學者と生活者がこのやうに區別されることはいつたいなにを意味するであらうか。生活者に眼を下げるを學者を生活者たる讀者はたんと手に取つたらよいだらうか。得能は、馬鈴薯づくりから更に野菜をひろげて『新聞讀み』『マルブルウの戯』などでは、ヨーロッパとアジヤの對峙にたいする觀念な意見を出してゐる。三十五になるまで苦い自我のなかで暮らしてきた伊藤整は、きはめて感覺的な文學方法にいつたん陥つてしまふ――すくなくとも作品のうへでは。

だが讀者は得能のなかに、伊藤整の表現によつて喜劇をされた人間を感じることはどうしてもできない。伊藤整の私が客觀化されずに、その動的意見から生れた得能が、作者から離れた處で動いてゐるのを見るのである。いつたい文藝道の觀念のなかから生れてきたものであるかどうか、まだこの道觀が公共心のあらはれとして構成的に行はれてゐる觀念の市民社會が、すなはち、私はいまだ觀念である得能かを求めようとしてゐる觀念の故觀であるといふことを、伊藤整はどう考へてゐるのだらう。彼は得能は觀じた。』といふ單純な一觀が、私たちの心情をかき立てえないのは作家のために觀念である得能が、その實體への激しい追求はけつして行はれてゐない。人間一般の幸福として感ぜられるものが、じつは小市民的觀念の故に破つて、ひろく讀者の心理に進入り込むことができないのだ。これは確實のひとつとして最近發表されてゐる『得能五郎の生活と意見』が、ここでは主觀的心情として投げ出されてゐるにすぎず、その實體への激しい追求はけつして行はれてゐない。人間一般の幸福として感ぜられるものが、じつは小市民的觀念の故に破つて、ひろく讀者の心理に進入り込むことができないのだ。これは確實のひとつとして最近發表された作品主人公を考へるのである。

だが、ここでは主觀的心情として投げ出されてゐるにすぎず、その實體への激しい追求はけつして行はれてゐない。人間一般の幸福として感ぜられるものが、じつは小市民的觀念の故に破つて、ひろく讀者の心理に進入り込むことができないのだ。これは確實のひとつとして最近發表された作品主人公を考へるのである。

なかつた。

ば層實なる辺境としての伊藤整の方法はたかく評價されねばならない。

しかしこの正しい方法かたんなる觀念の表現に留るか、作品のなかに實現されるかは、きり離して考へる必要があらう。ところでこの作品のねらひが、觀念の客觀化にあるのではなく、觀念の客觀化されてゐるといふことは注意されねばならない。殊に觀念が物語になつてくる。作中人物と作者はたがひに動いてゐるのである。二人が離れたがら等距離で動くとすれば、そしてそれが客觀化されてゐるとすれば、それはそれで成功である。

× ×

けれどもこの作品における二人の觀念は必ずしも密着してゐない。伊藤整はときどき見を切らす。『とにかく、横から覗はこの家の前の空間に野菜や薬をつくつて、食物を豊保する。長代だけなら何と かして暮らしやゆけるだらう。』（『學生時代』）などと、得能が突然に自覺するとき伊藤整のほんたうの顯が得能といふ個人の顯觀に於てつた表現をしてゐるのを無視すると。得能は時期に過ぎだられて、無かるく断ぜだしてゐるが、伊藤整はやのうしろでとまどひしてゐる。主人公と作者の事實には かならない。作者の私はけつして客觀化されてゐない。

そのやうな得能のあとを追はねばならぬ讀者は、たとへば得能が農作物への素朴な感覺から發して過去十何年になる作家生活を顧みるやうな言動に出逢つたとき、伊藤整の意を想ひつつ作品に不信の念を抱くのである。そして、『自分を客觀者であり得ると思つてゐる他の文學者としての氣分は一度崩してしまつて、生活者としての他の生き方と調ぜさせなければならない……』（『トロイカ』）と言はれたとき、文學者と生活者がこのやうに區別されることはいつたいなにを意味するであらうか。生活者に眼を下げるを學者を生活者たる讀者はたんと手に取つたらよいだらうか。得能は、馬鈴薯づくりから更に野菜をひろげて『新聞讀み』『マルブルウの戯』などでは、ヨーロッパとアジヤの對峙にたいする觀念な意見を出してゐる。三十五になるまで苦い自我のなかで暮らしてきた伊藤整は、きはめて感覺的な文學方法にいつたん陥つてしまふ――すくなくとも作品のうへでは。

だが讀者は得能のなかに、伊藤整の表現によつて喜劇をされた人間を感じることはどうしてもできない。伊藤整の私が客觀化されずに、その動的意見から生れた得能が、作者から離れた處で動いてゐるのを見るのである。いつたい文藝道の觀念のなかから生れてきたものであるかどうか、まだこの道觀が公共心のあらはれとして構成的に行はれてゐる觀念の市民社會が、すなはち、私はいまだ觀念である得能かを求めようとしてゐる觀念の故觀であるといふことを、伊藤整はどう考へてゐるのだらう。彼は得能は觀じた。』といふ單純な一觀が、私たちの心情をかき立てえないのは作家のために觀念である得能が、その實體への激しい追求はけつして行はれてゐない。人間一般の幸福として感ぜられるものが、じつは小市民的觀念の故に破つて、ひろく讀者の心理に進入り込むことができないのだ。これは確實のひとつとして最近發表された作品主人公を考へるのである。

『得能五郎の生活と意見』は、今日の文學の動きを意識するうへに、ある手掛りをあたへてくれる。それは、自然主義の脈内から生れ、明治、大正、昭和にかけて、綿々とつづき、あらゆる種の文學方法にいつのまにか感染してしまふ、なにか潜在的に根強い私小說的觀念から、獨自な方法で脱け出さんとしてゐるものであるからだ。獨自な方法とはなんであるか。それは私小說的雰圍を利用しながら、其處に留らず、もつとひろい世界に出て行かうといふ意圖のもとに生れた方法である。私をとりまく他の客觀化を通してゐるのだ。私自身の客觀化を通してゐるのだ。作者は說明してゐる。「……『私』なるものが客觀化され、どういふ社會のどういふ時代に屬するどういふ性格であるか、といふ點出において書かねばならない。またその『私』の告白のやうなものも、讀者の『心境』になる事實や感に依據せず、客觀化されて、ある時代ある性格のある行爲なり心理なりの一部として『描かれたもの』としてあるべきであつた。得能が突然に自覺するとき伊藤整のほんたうの顯が得能といふ個人の顯觀に於て、換言すれば、一歩私の外に出ればたちまち通俗小說と何人文學精神のなかに於て、作者自身たる私の客觀化を通りぬけて、しんの客觀小說が開花するだらうといふ見通しはきはめて安易なものであらう。いはば層實なる辺境としての伊藤整の方法はたかく評價されねばならない。

しかしこの正しい方法かたんなる觀念の表現に留るか、作品のなかに實現されるかは、きり離して考へる必要があらう。ところでこの作品のねらひが、觀念の客觀化にあるのではなく、觀念の客觀化されてゐるといふことは注意されねばならない。殊に觀念が物語になつてくる。作中人物と作者はたがひに動いてゐるのである。二人が離れたがら等距離で動くとすれば、そしてそれが客觀化されてゐるとすれば、それはそれで成功である。

× ×

けれどもこの作品における二人の觀念は必ずしも密着してゐない。伊藤整はときどき見を切らす。『とにかく、横から覗はこの家の前の空間に野菜や薬をつくつて、食物を豊保する。長代だけなら何と かして暮らしやゆけるだらう。』（『學生時代』）などと、得能が突然に自覺するとき伊藤整のほんたうの顯が得能といふ個人の顯觀に於てつた表現をしてゐるのを無視すると。得能は時期に過ぎだられて、無かるく断ぜだしてゐるが、伊藤整はやのうしろでとまどひしてゐる。主人公と作者の事實には かならない。作者の私はけつして客觀化されてゐない。

そのやうな得能のあとを追はねばならぬ讀者は、たとへば得能が農作物への素朴な感覺から發して過去十何年になる作家生活を顧みるやうな言動に出逢つたとき、伊藤整の意を想ひつつ作品に不信の念を抱くのである。そして、『自分を客觀者であり得ると思つてゐる他の文學者としての氣分は一度崩してしまつて、生活者としての他の生き方と調ぜさせなければならない……』（『トロイカ』）と言はれたとき、文學者と生活者がこのやうに區別されることはいつたいなにを意味するであらうか。生活者に眼を下げるを學者を生活者たる讀者はたんと手に取つたらよいだらうか。得能は、馬鈴薯づくりから更に野菜をひろげて『新聞讀み』『マルブルウの戯』などでは、ヨーロッパとアジヤの對峙にたいする觀念な意見を出してゐる。三十五になるまで苦い自我のなかで暮らしてきた伊藤整は、きはめて感覺的な文學方法にいつたん陥つてしまふ――すくなくとも作品のうへでは。

だが讀者は得能のなかに、伊藤整の表現によつて喜劇をされた人間を感じることはどうしてもできない。伊藤整の私が客觀化されずに、その動的意見から生れた得能が、作者から離れた處で動いてゐるのを見るのである。いつたい文藝道の觀念のなかから生れてきたものであるかどうか、まだこの道觀が公共心のあらはれとして構成的に行はれてゐる觀念の市民社會が、すなはち、私はいまだ觀念である得能かを求めようとしてゐる觀念の故觀であるといふことを、伊藤整はどう考へてゐるのだらう。彼は得能は觀じた。』といふ單純な一觀が、私たちの心情をかき立てえないのは作家のために觀念である得能が、その實體への激しい追求はけつして行はれてゐない。人間一般の幸福として感ぜられるものが、じつは小市民的觀念の故に破つて、ひろく讀者の心理に進入り込むことができないのだ。これは確實のひとつとして最近發表された作品主人公を考へるのである。

『得能五郎の生活と意見』は、今日の文學の動きを意識するうへに、ある手掛りをあたへてくれる。それは、自然主義の脈内から生れ、明治、大正、昭和にかけて、綿々とつづき、あらゆる種の文學方法にいつのまにか感染してしまふ、なにか潜在的に根強い私小說的觀念から、獨自な方法で脱け出さんとしてゐるものであるからだ。獨自な方法とはなんであるか。それは私小說的雰圍を利用しながら、其處に留らず、もつとひろい世界に出て行かうといふ意圖のもとに生れた方法である。私をとりまく他の客觀化を通してゐるのだ。私自身の客觀化を通してゐるのだ。作者は說明してゐる。「……『私』なるものが客觀化され、どういふ社會のどういふ時代に屬するどういふ性格であるか、といふ點出において書かねばならない。またその『私』の告白のやうなものも、讀者の『心境』になる事實や感に依據せず、客觀化されて、ある時代ある性格のある行爲なり心理なりの一部として『描かれたもの』としてあるべきであつた。得能が突然に自覺するとき伊藤整のほんたうの顯が得能といふ個人の顯觀に於て、換言すれば、一歩私の外に出ればたちまち通俗小說と何人文學精神のなかに於て、作者自身たる私の客觀化を通りぬけて、しんの客觀小說が開花するだらうといふ見通しはきはめて安易なものであらう。（筆者・文藝評論家）

書評

高木市之助著「吉野の鮎」

―記紀萬葉雜攷―

城島恒雄

一

高木博士の近著『吉野の鮎』が岩波書店から世に出る。博士の下に在つて研究に參與する者が、紙上の筆を取るのも如何かと思はれるし、よし良書の讀人々に讀まれる事を願つて敢て私觀を交へて紙介の文を綴つた所で先生の御本意とはなるまいと思ふのであるが――とにかく一讀してその外觀をでも傳へたいと思ふ。

末尾に載せる種々な文で、所謂諸編はこの十五編間に學會、講座、雜誌等の場に讀て成つたものゝ、主として上代日本文學の研究に關する論文である。

一つ一つの歌がどういふ事件に結合されてゐるか。萬葉の一つ一つの歌がどういふ事件に結合されてゐるか。最近古典文藝への憧憬の傾向は我が國内に於て激しいものがあるが、それがその傳統の流れをさかのぼりさかのぼりして萬葉の世界へ、記紀の世界へとたどつて行くといふことは自然である。古くして常に新しい上代日本人の生息を感ぜさせられる此分野には、實に近代的研究の手が未だ十分にはつけられてゐないのであるが、本書がその先驅の役割を引受けた意味は大きいと思ふ。

二

先づ、たとへば我々は古事記の中の經緯といへば、かの倭建命の御歌の條に見える一節を思ふ。倭は、國のまほろば、たたなづく、青垣山こもれる、倭しうるはし

我が天皇の皇子倭建命が、帝都を離れ離れた能煩野で埋葬を哀ひかねて、正に詠じ給はんとする時の歌である。國しぬびの歌といはれてゐる歌である。『自分は命に欲ひ研討の歌を東にすゝめて中途にたほる。帝都に帰る日は何時ぞ、さても恋しき故の空』をのべむ、『青々たる連山にかこまれて眠る大和の地は云々』といふ恋しい御歌である。

我々がこれを詠唱する間はよい。外にも我々は歌聖を逆めるに從つて此の歌が實は倭建命といふ實在の人物から脱出し給つた、

[illegible]部の驗文に載いてのべることは難しい。[illegible]を通じて一貫する觀察に對する態度といつたものをかいつまんでいへば次の樣になると思ふ。

[illegible]いはば御歌作の御歌でも何でもない事を卸るのである。その時のおどろき。

此の歌は民謡である――なつるるが、を正せば一つの民謡で元來謡が作つたかわからないやうなその一やまとの國の[illegible]本國の眞中にして、青々とした山なみにかこまれた盆地らしいよい所である」とうたへば此の歌になる。さういへば成程この歌は元來恋しい謡でも何でもない。倭建命云々を取除けば結局單獨立した一つの民謡なのである。倭建命の御謡ではない。かう考へて來ると記紀の歌は殆んど[illegible]さうであることになる。[illegible]の謡から切離して考へると――[illegible]にして[illegible]めてみると天皇の御歌でもない皇子の御謡でもないただの民謡である。とすれば記紀といふものすらばら〳〵の歌をよせあつめた作り話にすぎないものになつてしまふ。（此の歌に比つて　自分では新しい方法によつて記紀などといふ古謡の正記を[illegible]ひらんでゐる人の如何に考いこか。）

我々は次に、倒よく考へてみるとさうでもない事を知る。民謡は民謡である。だが、謡が作つたともしれぬ、又説明のしやうによつては悲しい謡にもなり[illegible]謡にもなるといふ民謡の歌が、[illegible]倭建命といふ[illegible]を中心としてまとめられるその大きな意味がある。[illegible]者がこのやうに區別されることはいつたいなにを意味するであらうか。生活者に眼を下げるを學者を生活者たる讀者はたんと手に取つたらよいだらうか。得能は、馬鈴薯づくりから更に野菜をひろげて『新聞讀み』『マルブルウの戯』などでは、ヨーロッパとアジヤの對峙にたいする觀念な意見を出してゐる。三十五になるまで苦い自我のなかで暮らしてきた伊藤整は、きはめて感覺的な文學方法にいつたん陥つてしまふ――すくなくとも作品のうへでは。

だが讀者は得能のなかに、伊藤整の表現によつて喜劇をされた人間を感じることはどうしてもできない。伊藤整の私が客觀化されずに、その動的意見から生れた得能が、作者から離れた處で動いてゐるのを見るのである。いつたい文藝道の觀念のなかから生れてきたものであるかどうか、まだこの道觀が公共心のあらはれとして構成的に行はれてゐる觀念の市民社會が、すなはち、私はいまだ觀念である得能かを求めようとしてゐる觀念の故觀であるといふことを、伊藤整はどう考へてゐるのだらう。彼は得能は觀じた。』といふ單純な一觀が、私たちの心情をかき立てえないのは作家のために觀念である得能が、その實體への激しい追求はけつして行はれてゐない。人間一般の幸福として感ぜられるものが、じつは小市民的觀念の故に破つて、ひろく讀者の心理に進入り込むことができないのだ。これは確實のひとつとして最近發表された作品主人公を考へるのである。

『得能五郎の生活と意見』は、今日の文學の動きを意識するうへに、ある手掛りをあたへてくれる。それは、自然主義の脈内から生れ、明治、大正、昭和にかけて、綿々とつづき、あらゆる種の文學方法にいつのまにか感染してしまふ、なにか潜在的に根強い私小說的觀念から、獨自な方法で脱け出さんとしてゐるものであるからだ。獨自な方法とはなんであるか。それは私小說的雰圍を利用しながら、其處に留らず、もつとひろい世界に出て行かうといふ意圖のもとに生れた方法である。私をとりまく他の客觀化を通してゐるのだ。私自身の客觀化を通してゐるのだ。作者は說明してゐる。「……『私』なるものが客觀化され、どういふ社會のどういふ時代に屬するどういふ性格であるか、といふ點出において書かねばならない。またその『私』の告白のやうなものも、讀者の『心境』になる事實や感に依據せず、客觀化されて、ある時代ある性格のある行爲なり心理なりの一部として『描かれたもの』としてあるべきであつた。得能が突然に自覺するとき伊藤整のほんたうの顯が得能といふ個人の顯觀に於て、換言すれば、一歩私の外に出ればたちまち通俗小說と何人文學精神のなかに於て、作者自身たる私の客觀化を通りぬけて、しんの客觀小說が開花するだらうといふ見通しはきはめて安易なものであらう。（筆者・文藝評論家）

書籍・文房具
積文館書店
東中洲電停前
電話東③一七〇番

進調品産土品念記　峰高最燒田有術美
深川製磁支店
東中洲玉屋前電話東③四三五五番

堂

日本評論社新刊

松竹大スペクタクル！
領本事見輔大藤伊星巨の劇代時たつ起に遂！年四伏雌
マラド大力迫超の戀悲と劍る彩に嶮天の峡野吉！揮發を
峡王驚
月伏大三清河坂
形見原井水津東
[illegible]清
[illegible]英秀將三
[illegible]子男夫郎助
原作十好三郎
松竹映畫京都撮影所作品
竹映画劇場